



市立病院だより

ほほえみ

発行 越谷市立病院
 発行人 院長 丸木 親
 編集 院内情報誌編纂委員会
 連絡先 〒343-8577
 越谷市東越谷10-47-1
 電話 048-965-2221 (代)
 F A X 048-965-3019
 発行日 平成30年7月 (No.36)

難聴について

耳鼻咽喉科部長

松岡 理奈

難聴とは、特定の音を聞く能力を失ったことを意味しており、あらゆる症状の中でも多くの人が感じたことのある症状の一つです。難聴の種類には、伝音難聴、感音難聴、混合難聴があります。

伝音難聴は、外耳く中耳の障害が原因です。外耳く中耳では音は空気の振動として伝わり、鼓膜付近の仕組みによって、その振動が増幅されます。振動の増幅が障害された状態であり、中耳炎が代表的な疾患といえます。

感音難聴は中耳よりも更に奥に位置する内耳と呼ばれる部分と、そこから脳につながる聴神経や中枢神経に何らかの障害が起こることです。

内耳には、蝸牛と呼ばれるカタツムリの殻のような器官があり、音の振動を感じる有毛細胞が順番に並んでいます。この細胞が、音を電気信号に変えて、神経を通して脳に伝え、脳が音を分析しています。感音難聴は入ってきたこの情報がうまく伝わらない状態です。特に有毛細胞は年齢とともに減少していくため、高齢になると高い音が聞こえづらくなってきました。

混合難聴は、伝音難聴と感音難聴の両方が混在して起こっている状態です。

難聴の原因として、中耳炎や加齢性変化の他、生まれつき聞こえに関わる器官の奇形がある、機能が失われている場合があります。また、ウイルス感染や何らかの疾患で、難聴になるケース、騒音などによって聴覚器官が傷ついて難聴となるケース等があります。よく目にする疾患として、突発性難聴、低音障害型感音難聴、耳垢栓塞等があります。

診断には、鼓膜を確認し、聴力検査を行います。疾患によってはCTやMRIが必要となります。治療して治る難聴もあれば、治療

困難なもの、治療することによって難聴が軽くなるものなど様々です。また、難聴が残ったとしても、現在は補聴器の進歩により、日常生活に大きな影響を与えることなく過ごすことが可能となりました。

聴覚は五感の一つであり、コミュニケーションに不可欠な感覚です。難聴になるということは、日常生活そのものに強い影響を受けることとなります。早めの診断や投薬などの医療介入により、今までの生活を送れる可能性が十分にあります。まずは難聴を感じることがありましたら、是非、耳鼻咽喉科にご相談していただくことをお勧め致します。



急性中耳炎とは？

8・1病棟 看護師長

大塚 佐和子

耳の奥にあり、鼻や口へとつながる『中耳』という部分に細菌やウイルスが入り込み、炎症が起きることや、膿が溜まる病気です。

小さいお子さんがかかりやすい印象がありますが、3歳までに80%くらいのお子さんがかかると言われています。小さなお子さんは、大人に比べて「耳管」と言う管が太く短くなっているため、鼻や喉に付いたウイルスが中耳に入り込みやすく、中耳炎になりやすいと言われています。

中耳炎が疑われる乳幼児のサイン

▼機嫌が悪い、夜泣きをする



▼耳をよく触る



▼首をしきりに振る



▼粘りのある黄色い鼻水が続く



中耳炎にかかると、耳に強い痛みを感じる、耳の聞こえが悪くなる、高熱が出るといった症状を患うことがあります。酷くなると耳だれのような症状がみられることもあります。

痛みを訴えられない赤ちゃんは、機嫌が悪くなり、ぐずる等の行動をします。耳を触る、耳を気にする仕草があるときは要注意です。

―― 中耳炎の家庭でのケア ――

中耳炎は夜中に突然痛みだし、発熱することも珍しくありません。耳の後ろを冷やすことや、鎮痛解熱剤を内服することで痛みがやわらぎます。熱がある時は、こまめに水分補給をし、静かに過ごしてください。これらの処置で、痛みが和らぎ熱が下がったとしても、翌日には耳鼻咽喉科の受診が望ましいです。

―― 中耳炎の予防 ――

中耳炎は風邪から始まるケースが多いので風邪を予防することが中耳炎の予防にもつながります。耳とつながっている、喉、鼻をケアしてください。

鼻水には、細菌やウイルスなど炎症を引き起こす原因となるものがたくさん含まれています。鼻水はこまめにかむようにしてください。鼻をかむときは、力まかせにかまないで片方の鼻を押さえ片方ずつ、静かにかむようにしてください。自分で鼻をかめない赤ちゃん等には、鼻吸引器で吸引しあげると良いかもしれません。

中耳炎の症状

急性中耳炎

▼耳の痛み



▼耳だれ



▼発熱



▼難聴



滲出性中耳炎

▼難聴



慢性中耳炎

▼耳だれ



▼難聴



真珠腫性中耳炎

▼難聴



▼めまい



▼顔面麻痺



▼髄膜炎



中耳炎と薬について

薬剤科 薬剤師

白川 直人

今回のテーマである中耳炎ですが、小さいころに私もよくかかった記憶があります。大人になってから、この病気にはかかっていませんが、自分に都合の悪い話で耳が痛くなることは今でも時々あります。今回、中耳炎と薬についてお話しさせていただきます。

中耳炎の種類によって治療は少々異なりますが、痛み止めや抗菌薬などの飲み薬による治療、耳に溜まった膿を出す治療などがあります。痛み止めとして使われることがあるアセトアミノフェンという薬は、19世紀から使われている歴史のある薬であり、お子様からお年寄りの方まで、比較的安心して使うことができます。また、痛みを抑える効果のほかに、熱を下げる効果もあります。多くの方に使える薬であるため穏やかに作用し、高熱で苦しんでいる患者さんの体温を下げ、体を楽にしてくれる薬です。



抗菌薬としてよく使われるアモキシシリンという薬は、カプセルと粉薬、2種類の剤形があります。小さいお子様には粉薬で出されることがほとんどだと思いますが、量が多くて飲ませにくい、飲んでくれないということもあるのではないのでしょうか。

お子様が嫌がって、薬を飲ませにくい時は、お水の代わりにアイスクリームやコンデンスミルク、お砂糖などに混ぜると飲ませやすくなります（アレルギーがある場合は注意してください）。ミルクや普段のお食事（お粥など）に混ぜることは、そのもの自体を嫌いになってしまう可能性があるため、おすすめできません。また、ヨーグルトやスポーツドリンクなど、酸味のあるものに混ぜてしまうと苦味が強く出てしまう粉薬もあります。

粉薬に対して苦手意識があっても、飲ませ方を少し工夫することで、お子様が上手に薬を飲むようになるかもしれません。当院の薬局（1階／会計横）でもお子様への薬の飲ませ方に関するパンフレットをお渡しできますのでご利用ください。

新採用医師の紹介

○ 平成30年4月1日付

(消化器科) 亀井 将人 (かめい まさと)

(外科) 塚本 亮一 (つかもと りょういち)

(内科)

山田 茂弘 (やまだ しげひろ)

(循環器科)

相川 達郎 (あいかわ たつろう)

(小児科)

藤原 恵 (ふじわら めぐみ)

(婦人科)

藤岡 彩 (ふじおか あや)

(婦人科)

前原 真里 (まえはら まり)

(脳神経外科)

杉山 夏来 (すぎやま なつき)

(脳神経外科)

泉 響介 (いずみ きょうすけ)

(耳鼻咽喉科)

賀屋 勝太 (かや しょうた)

編集後記

これから暑い夏がやってきます。体調が崩れやすいですから、気を付けましょう。よく水分を摂って、よく食べて、良く遊ぶ、そして良く休む。普通のことですが、大事なことですよ！お忘れなく！

院内情報誌編纂委員長 尾羽澤 英子